(2)　阿弥陀屋敷の貉

昔、松の木の地に何時の頃から祭られたものかは定かでないが、深い杜に囲まれた阿弥陀八幡と呼ばれる小さい祠が建ち、此の本尊の「弥陀の金仏」には、頗る霊験の灼かなものがあり、此の祠の前を馬に乗ったまま通れば、必ず落馬させられたものと伝えられている。これを恐れ畏んだ里の人達は相談の果て、此の金仏を地中深く埋めてしまったため、その後の祠は荒れるに任せて朽ち果て、暫くの間は曽ての祠に通ずる一筋の小径を残して、うら淋しい妖気が漂う所となっていたと云う……。さて此の頃、小出の旧家　某に夜番奉公をしていた老夫婦が、此の松の木の地の辺りに住んでいて、奉公先に忠実一途の爺やは家に帰らぬことも屢であったと云う。ところがこれを知った此の辺りに巣を喰う一匹の古貉がいて、夜な夜な爺やに化けて現れ、人の好い婆やを騙して、すっかりご馳走を食べて行くので、なかなかお金が溜らなかった。すっかりこれに困り果てた婆やは、遂に爺やと示し合わせて「此の次に家に帰る時には、必ず草履を左の手に持って来ること」と約束していたところ、やがて次の晩に現れた爺やは、右手に草履を持って来たので、「これはまたいつもの古貉の仕業」と思い定めて、気の強い婆やはいきなり囲炉裏の中の火灰を掛けて薄刃で切りつけたと云う。不意を打たれた貉は、慌てて逃げ出したものの傷の痛手は深く、遂に曽ての弥陀八幡の祠の跡で、息が絶えたと言う……。

何時ぞやに埋められた、在りし日の阿弥陀八幡の金仏の因縁に纏るものや……。